

# 特別支援教育における 家庭・学校間の連携システムの構築

—「デジタル連絡帳」の活用—

中川 宣子・高岸 正司

(京都教育大学附属特別支援学校)

Construction of the cooperation system for special needs education  
between home and schools.  
—Utilization of “Digital Cooperation Notebook”—

Noriko NAKAGAWA Masashi TAKAGISHI

2014年11月30日受理

**抄録:**近年、子どもを取り巻く環境が大きく変化しており、子どもたちを健やかにはぐくむためには、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携・協力のもと、教育支援活動を行っていくことが重視されている。特に保護者・教師・学校の連携協力は、子どもの教育支援を行う上で必要不可欠である。しかし、保護者・教師・学校間の支援連携の現状は、子どもに関する情報が一方通行になり十分に共有されておらず、本来の目的とする支援連携が効果的に行われているとはいえない。そこで本研究は、特別支援教育における支援連携の問題点を解決するために、「デジタル連絡帳」の活用による保護者・教師・学校の三位一体の教育支援連携活動の強化を図ることを目的とする。ここでいう「デジタル連絡帳」とは、家庭の子どもの実態情報、学校の学習実態情報をそれぞれ保護者と教師が入力し、入力した情報を蓄積しデータ化して、家庭や学校でいつでも閲覧できるようにしたものである。この「デジタル連絡帳」活用によって、保護者・教師・学校の情報を一元管理し、子ども情報を共有化し、蓄積しデータ化した情報を、子どもの教育支援活動に活用するといった一連の連携システムの構築を提案する。

**キーワード:**「デジタル連絡帳」、保護者・教師・学校間の連携システム、教育支援連携活動

## I. はじめに

近年、子どもを取り巻く環境が大きく変化しており、未来を担う子どもたちを健やかにはぐくむためには、学校、家庭及び地域住民等がそれぞれの役割と責任を自覚しつつ、全体で教育に取り組む体制づくりを目指す必要がある。このことは改正後の教育基本法（平成18年法律第120号）教育の目的及び理念（第1章第13条）の中で「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」として新設された。またベネッセ教育総合研究所（田中2004）では、「教師の指導力」と「家庭の教育力」の高低パターンによる子どもの総合学力を比較した研究が報告されている。ここでは、個別の項目における局所的な連携だけでなく、総体としての「教師の指導力」と総体としての「家庭の教育力」の双方が相まっていく形で、子どもの総合学力を高めていくことが示唆されている。こういったことが背景となり、今、地域住民や豊富な社会体験を持つ外部人材が参加する学校サポーター等を活用し、学校支援地域本部や放課後子供教室、家庭教育支援、地域ぐるみの学校安全体制の整備、スクールヘルスリーダー派遣などの学校・家庭・地域の連携協力による

様々な取組を推進し、社会全体の教育力の向上を図る、連携・協力の取組（「学校・家庭・地域の連携協力推進事業（平成26年 生涯学習政策局）」）が進められている。

特別支援教育においては早くから、家庭・学校の連携について様々な取組が行われてきた。例えば「個別的教育支援計画」においては、障害のある子ども一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考え方の下、長期的な視点で、乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫して的確な支援を行うことを目的とされ、直接かかわる医療、保健、福祉、教育、労働等の関係者・機関が、本人及び保護者の意向を十分踏まえて、一人一人のニーズに応える形で、共に検討する必要があるといわれてきた。このとき、保護者は重要な支援者の一人であり、積極的な参画を促し、その意見を聞いて、支援の目標を設定することが重要とされている。

つまり、子どもの教育支援活動において、子どもに直接関与する保護者・教師・学校、三位一体の連携・協力は、今や必要不可欠である。それでは、保護者・教師・学校の連携・協力はどうすればよいのか。そのためにはまず、保護者・教師・学校が、子どもの情報を正確に伝え合い、正しく理解し、共に子ども情報を共有化するところから始まる。

ではこの保護者・教師・学校間の支援連携の現状はどうだろうか。現状の教育支援連携活動には、懇談会や学校・学級通信、電話、通知表、個別の指導計画、職員会議等、様々な手段や方法がとられ、保護者・教師・学校それぞれが、子どもに関する多くの情報を発信し活動していることがわかる。

ところが、それぞれから発信される情報は、保護者は保護者の視点に立った子どもの見え方や要望を教師や学校に伝え、教師は教師としての意図や意見を保護者や学校に伝え、学校は組織としての意見を保護者や教師に伝えるといった、それぞれの立場に基づく子どもの捉え方を一方的に伝達しているのではないだろうか。大切なのはまず、実際の子どもの情報、つまり事実に基づいた子ども情報を共有化することが前提であり、そこからそれぞれの立場に基づいた考えや捉え方を伝達しなければ、それぞれの情報は一方通行となり、「なかなかわかってもらえない」「全然伝わらない」といった現象が起きている。さらに言葉による弊害や、知識・理解不足による誤解、また子どもの捉え方が理解し合えない、コミュニケーション不足のため対応が後手に回るといったトラブルが起き、結果的に、学校に対する信用の低下や関係の悪化が生じ、やがては教師や学校への不信・不安となることもある。

ではどうすれば、子ども情報を正確に伝達し、正しく理解し、情報を共有化して三位一体の教育支援連携活動の強化を図ることができるのか。連携とは、「子どもに関する情報を密に取り合っ、一つの目的のために一緒に物事をしていくこと」である。つまり、教育支援連携活動とは、子どもに関する情報を密に取り合っ、子どもの成長・発達のために互いに教育・支援活動を行うことである。

本研究は、このような背景を受けて、保護者からの子ども情報を的確に収集し、教師・学校からの子ども情報は保護者に正確に提供し、担任教師だけでなく学校全体で子どもの成長・発達をより支援する方法はないか、さらに保護者・教師・学校から発信される情報を一元管理し、それをデータとして教育支援活動に有効活用できる方法ないかと考えた。

そこで、既存の「手書きの連絡帳」をデジタル化した「デジタル連絡帳」を活用することによ

って、①保護者・教師・学校の情報を一元管理し、②子ども情報を共有化し、③蓄積しデータ化した情報を子どもの教育活動に活用する連携システムを提案し、保護者・教師・学校の三位一体の教育支援連携活動の強化を図ることを目的とした（図1）。

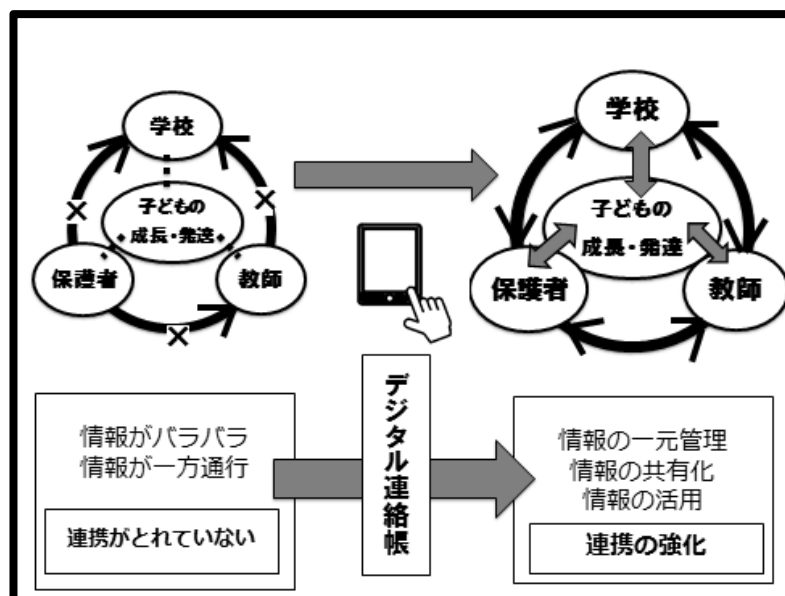


図1 研究の目的

## II. 研究の背景

### 1. 「連絡帳」とは

これまでの「連絡帳」は日々、家庭と学校を往復するノートである（写真1）。その内容には、健康状態や食事、排泄といった基礎情報があり、保護者は家庭の子どもの様子を記録、また教師は学校での学習の様子を記録し、教育活動に関する要望や考え、時には悩み等が記してあり、従来から多くの学校で利用されている。（様式は一定していないが、サンプルを図2に示す）。教師は日々の実践の中で具体的な出来事を通して子どもを理解し、子どもの教育・指導を常に修正、調整し続けているため、毎日の「連絡帳」の内容は貴重な情報源の一つである。

「連絡帳」について宮武・高原・足立（1989）は、盲・聾・養護学校及び特殊学級を合わせて190名の教師にアンケート調査を行い、その結果「連絡帳」使用率は全体の90%、そのうち80%以上の教師が「連絡帳」を必要かつ有効であると得られている。そこでは「連絡帳」の意義として、親との感情的な交流を作る、子どもの情報を交換し合う、指導の一貫性を築く、日々の記録等があげられ、また「連絡帳」の問題点としては、記述時間の保障がない、内容に偏りができる、一方通行による危険があげられ、使用後は家庭で保管されることが多く、記録としての課題が残ると指摘している。

このように「連絡帳」の役割として、保護者との関係を作る手だてとして活用されていることがわかるが、「連絡帳」を書くことが、保護者との関係を即保障してくれるのではない。相互の

意思交換が十分になされることが関係を作り出す条件である。記述の量とともに、記述内容が問題となる。筆者は前研究で「連絡帳」の記述内容分析を行ったが(中川 2011, 2012)、その結果、記述内容の中心が子どもの様子「事実」やそれに対する「解釈」や「感想」であったことを考えると、事実経過についての誤解や視点のずれなどが生じやすいことがわかる。毎日の「連絡帳」のようなこまめな交流によって書かれた心情が土台となって、コミュニケーションは深まる。

また「連絡帳」はその日のもっとも印象に残ったことを短時間で表現しようとするので、教師の子どもに対する感性が素直に表れやすい。宮武ら(宮武・高原・足立 1989)も、「連絡帳」を使う限り、子どもに対する感性をいつも点検し磨くことが、結局、保護者との関係を作る条件になると述べている。

さらに指導の連携や一貫性についても、障害が重度化し多様化するにつれ教師は保護者との連絡をより必要と考えている。「連絡帳」によって、家庭と学校での子どもの様子を伝え合い、指導の一貫性を作り出し、「連絡帳」を単なる事務連絡としてではなく、それ以上の指導の手だてとして考えている。にもかかわらず、教師は「連絡帳」を書く時間の保障がなく十分に記述できない現状がある。多くの教師は、毎日「連絡帳」を書いているが、時間割の合間を見つけて慌ただしく書いていることが多く、場合によっては、すべての子どもの記述ができず不平等になるという問題もある(宮武 1989)。

このように保護者と教師の多大な労力によって書かれた「連絡帳」であるが、「連絡帳」で得られた情報を、実践に活用するための子どもの記録として活用している例は少ない。実際には教師が通知表を書く際に、参考資料として見返すくらいである。そこで「連絡帳」の情報をデータとして、この子が今何を必要としているのか、保護者・教師・学校は子どもに対して何をなすべきかを問いつつ、これらのことに気づき考え、三位一体の教育支援連携活動の強化を図るための一つの方法として、「連絡帳」を活用するシステムを構築したいという願いが、本研究の出発点となっている。



写真1「手書きの連絡帳」

		月	日	曜日	天気		
家庭 通信	節日処理					連絡・持ち物・朝 食等	下校
	本日起床						
学校 通信	健康					今日の水遊びは 今日のプールは 保護者のサイン	
	排便 状態				時 分	連絡・その他	

図2「手書きの連絡帳」サンプル

## 2. 「デジタル連絡帳」とは

「デジタル連絡帳」は、従来の「手書きの連絡帳」をデジタル化したものであり、家庭の子どもの実態情報を保護者が、学校の学習実態情報を教師が入力し、入力した情報はサーバーに蓄積、データ化して、家庭や学校でいつでもそれらを閲覧できるようにしたものである。「デジタル連

絡帳」の特徴は以下の通りである。

まず基礎情報としての「健康状態（良い・普通・悪い）」「就寝時刻（○時○分）」「起床時刻」「排便（有・無）、状態（硬い・普通・やわらかい）」「下校の様子（誰と・どこで）」の5項目が入力できる。これら5項目は、従来の「手書きの連絡帳」にもある共通した項目である。日々の健康状態はもとより、就寝時刻・起床時刻といった睡眠のリズムに関する情報は、特にてんかん等があり生活習慣を把握する必要のある子どもたちにとっては、欠かせない情報である。そして日々の活動の様子を知らせる「家庭での様子」「学校での学習の様子」「重点指導に関すること」の3項目の入力欄がある。この3項目に対しては「コメント欄」が添えられており、共通のテーマについて、保護者と教師が言葉とイラストでやり取りできるようになっている。

以上のような項目選定には、どのような情報を入力するか、つまりは子どもの教育支援活動において必要とする情報は何かについてを、従来の「手書きの連絡帳」の記述内容の分析（2011, 2012, 2013, 2014 中川）から検討し選定したものである。

次に入力方式と表記方法については、誰でも簡単に使いやすく、また見てわかりやすい表記方法という観点から、例えば、「就寝時刻」「起床時刻」であれば、項目部分をタップすると、時刻選択ダイアログとなる「6時」「7時」を画面に表示し、その中から選択してタップする入力方式になっている。また基礎情報である「排便の有無と状態」「下校の様子」についても同様に選択ダイアログからの選択、タップ入力となっている。

さらに「家庭での様子」「学校での学習の様子」「重点指導に関すること」の3項目については、テキスト形式のフォーマットのため、自由に文章が入力でき、さらにより正確な情報を伝達できるよう、写真や動画・音声も入力できるようになっている。写真・動画・音声は、子どもの様子を伝えたいとき、言葉よりも多くの情報を伝え、さらに子どもの学習環境、手だて、周囲の人との関わり等、活動周辺のリアルタイムな情報も伝えることができる。そして喜怒哀楽の感情や心境を表したイラスト（21種類）を添付できる機能があり、テキストメッセージにこれらイラストを添えることで、文章・写真・動画では表現しにくい感情の機微も簡潔に伝えることができる。

出力方式と表記方法については、見やすい、わかりやすい、使いやすいという観点から、蓄積した情報はグラフや表といった視覚的な表記になっている。例えば「就寝時刻」「起床時刻」は、必要な期間を入力することで、その期間の情報が棒グラフ表記となり、また「健康状態」「排便」「下校の様子」は、時系列の一覧表で表記されている。

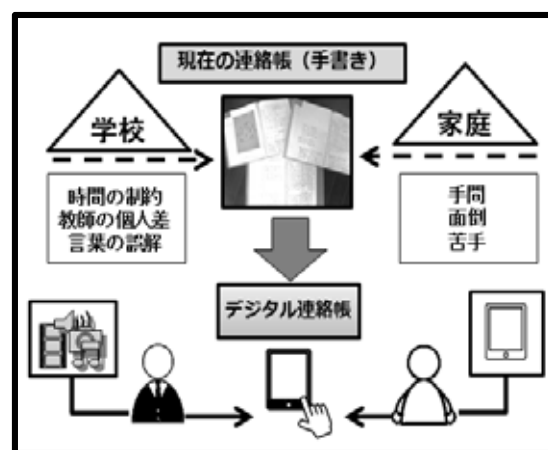


図3 手書きの連絡帳から「デジタル連絡帳」へ

### Ⅲ. システムの概要

本研究は、子どもの成長・発達を教育支援する保護者・教師・学校が抱える支援連携の問題点を、それぞれの受信・発信する情報がバラバラ且つ一方通行であると捉え、この問題点を解決し、保護者・教師・学校の三位一体の教育支援連携活動の強化を図ることにある。

その一つの方法として、「デジタル連絡帳」を活用し、①保護者・教師・学校の情報を一元管理する、②子ども情報を共有化する、③蓄積し、データ化した情報を子どもの教育活動に活用する連携システムの提案である。

本研究では、このシステムを「デジタル連絡帳活用システム」と呼ぶ(図4)。

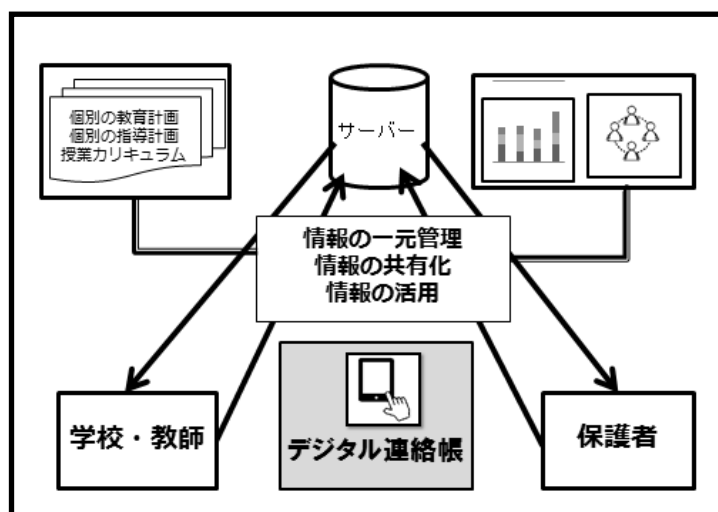


図4 デジタル連絡帳活用システム

「デジタル連絡帳活用システム」は、WebベースのClient・Server型である。保護者・教師・学校はタブレットPC等を使用し、サーバーにアクセスする際にユーザー認証を行う。個人ページが表示され、プライバシーが守られている。実際の設計にあたっては、保護者・教師双方の観点に立った、誰もが簡単に使いやすい、便利なシステム開発であることを目指した。

保護者と教師は「デジタル連絡帳」に、健康面等の基本情報や子どもの家庭での様子、学校での学習の様子を毎日入力する。「デジタル連絡帳」は、テキストだけでなく、写真・動画・音声入力が可能であり、また選択してタップする機能等、誰もが簡単に使いやすいようになっている。これら一連の作業は、パソコン、タブレットPC、ブロードバンドを使って行うが、家庭・学校共に情報機器がかなり普及してきており、システム導入の後押しとなる状況がある。特に近年の保護者世代にとっては、スマートフォンやタブレットPCを日常的に利用しており、メール作成のための文字入力にも慣れており、抵抗なく簡単に行える行為となっている。またタブレットPCは、写真や動画・音声機能が付加されておりコンテンツとしても充実している。これまで利用してきた「手書きの連絡帳」の作業量は、「デジタル連絡帳」によって軽減すると考えられる。

一方「デジタル連絡帳」に入力した情報は、サーバーで一元管理する。サーバーに蓄積した情

報は、保護者・教師・学校が、本システムにアクセスすることによって、従来のテキストに加え、添付された子どもの写真や動画も見る事が可能である。写真や動画の配信は、子どもの実態情報をよりリアルにし、多くの情報を共有することができる。そこには単に子どもの姿だけでなく、子どもの置かれている状況や周囲の子どもたちの様子、教師の指導法等、子どもを取り巻く学習環境が含まれた情報であり、このことは特別支援教育にとって非常に有効な情報源であり、保護者・教師・学校による子どものための教育・支援活動に役立てることができる。保護者にとっては、まさに子どもの成長記録となり、教師にとっては子どもの発達や健康状態を家庭の状況も含めて情報収集することができ、さらに教師自身の授業記録、授業研究等の資料にもなる。

蓄積しデータ化した情報の活用については、日々蓄積していく情報をデータ化して、教育活動である P・D・C・A (Plan・Do・Check・Action) 実践で仮説検証し、そのメカニズムを開発することが求められる。例えば、就寝・起床時刻の活用であれば、毎日の情報を入力し、入力情報を月単位でグラフ化することによって、視覚的に、その子どもの睡眠リズムを把握することができる。もしそこに問題が生じれば、保護者と教師、学校はその情報を共有し理解することで、問題の原因を明確にし、生活（睡眠）リズムに関する指導目標や手だて等、三位一体で協力した教育支援活動が実践できるようになる。これら実践のプロセスは、さらに継続して「デジタル連絡帳」に入力することでその後の情報も蓄積し、再度データ化してチェックを行うことができる。このように「デジタル連絡帳」によって収集し蓄積した情報を、子どもの教育支援活動に活用することによって、保護者と教師と学校とが、連携して子どもの成長・発達を支援強化する一つの連携システムが確立できる。

#### IV. まとめと今後の課題

家庭と学校が連携協力して子どもの成長・発達を支援するためには、子どもの情報をまず共有化するところから始まる。子どもの成長・発達の現状はどうか、そして今何が課題なのか、そこからその課題に対して、保護者と教師と学校は、教育支援におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めなければならない。その一つの方法として、本論文では、保護者・教師・学校が、いつでも必要なときに、必要な情報を入手し、子どもの情報を共有化し、子どもの成長促進に活用できる、「デジタル連絡帳」の活用による三位一体の教育支援連携活動システムを提案した（図5）。

本システム「デジタル連絡帳活用システム」は、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室、保育所、幼稚園、放課後等デイサービス等、現在「連絡帳」を使用している諸機関での活用も期待される。

今後は教育現場にてシステムを試用し、性能評価やユーザー評価によりその有効性を証明し、保護者・教師・学校が連携して子どもの成長・発達を支援強化する一つの連携システムの事例を検証していく予定である。

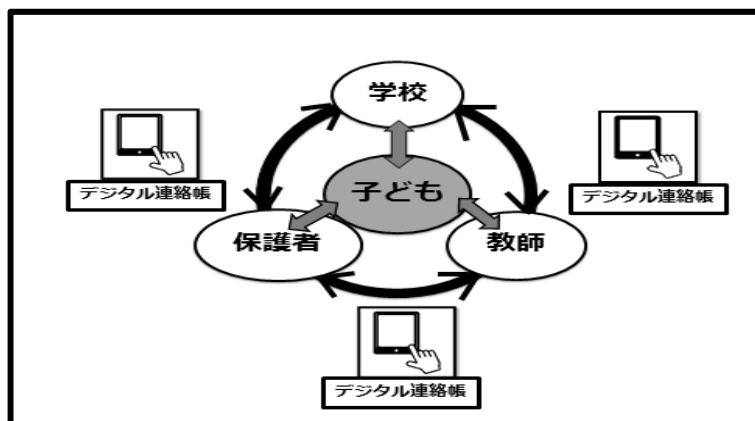


図5 「デジタル連絡帳」による三位一体の教育支援連携活動

#### 【謝辞】

本研究の一部は、京都教育大学平成26年度教育研究改革・改善プロジェクト研究助成を受けて行った。また本研究で活用した「デジタル連絡帳」に関しては、(株)Switchに多大なる協力をいただいた。改めて深く感謝申し上げます。

#### 【附記】

本論文の要旨は、日本教育大学協会研究集会（平成26年10月）、日本LD学会第23回大会、ATACカンファレンス2014にて発表した。

#### 【参考文献】

1. 教育基本法（平成18年法律第120号）. 第1章教育の目的及び理念. 第13条学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力
2. 田中勇作(2004) 総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす-学力向上のための基本調査2004. 第3章3 学校（教師）と家庭の連携の大切さ. ベネッセ教育総合研究所. 101-108
3. 宮武宏治・高原望・足立由美子（1989）：障害児教育で使用される連絡帳の調査研究. 特殊教育学研究, 27（2）, 67-73.
4. 中川宣子(2014)特別支援学校における家庭・学校間の連携システムの構築—「デジタル連絡帳」の開発と活用システム—. 平成26年度日本教育大学協会研究集会発表概要集. 168-169
5. 中川宣子（2014）家庭・学校間連携のための「デジタル連絡帳」の作成と活用システムの開発—「家庭欄」「学校欄」記述内容の特徴について—. 日本LD学会第23回大会. 405-406
6. 中川宣子（2014）家庭・学校間連携のための「デジタル連絡帳」の開発と活用システム. ATACカンファレンス2014. 67-68
7. 特別支援教育における家庭・学校連携システムの構築と検証. 平成25年度日本教育大学協会研究集会発表概要集. 273-274
8. 中川宣子（2012）特別支援教育における家庭・学校連携システムに関する研究～教師の連絡帳記述内容分析を通して～. 日本臨床発達心理士会第8回全国大会論文集. 104p
9. Noriko, Nakagawa(2012)Recording Teacher's Viewpoints on the Teaching and Learning Activities An Effective Strategy to Support Curriculum Development by Using a Digital Camera, *The Third Pacific-Rim Conference on Education. Teacher Education and Professional Development.* 46-48
10. 中川宣子（2012）家庭・学校の連携による教育的なニーズに対応した指導・支援-連絡帳記述内容の分析-. 京都教育大学附属教育実践センター機構 教育支援センター 教育実践研究紀要第12号. 185-188
11. 中川宣子（2011）教育的ニーズに対応した授業づくりに関する研究～連絡帳分析による試み～日本発達障害会第46回研究大会論文集. 178-179